

第2節 大野川中流域における縄文後・晩期土器の編年

(付図参照 番号は付図の土器番号)

大分県の縄文後晩期の土器編年は、これまで、賀川光夫^{註1}を中心に、乙益重隆・前川威洋^{註2}によりその研究がなされており、筆者も昭和54年に宇佐市の縄文貝塚の報告書をまとめる際縄文後期土器編年の一試案を提示したことがある^{註3}。

以上の研究の中でも特に後期の編年は中津市植野貝塚をはじめとする周防灘沿岸や大分市小池原貝塚に代表される。別府湾沿岸の貝塚調査から研究を進めたものである。それらの貝塚は、前節でも述べたが、後期前半で大部分が貝塚形成活動を終了してしまう。このため、編年の資料も後期前半が充実しているのに対し、後期後半は希薄なものとなっている。

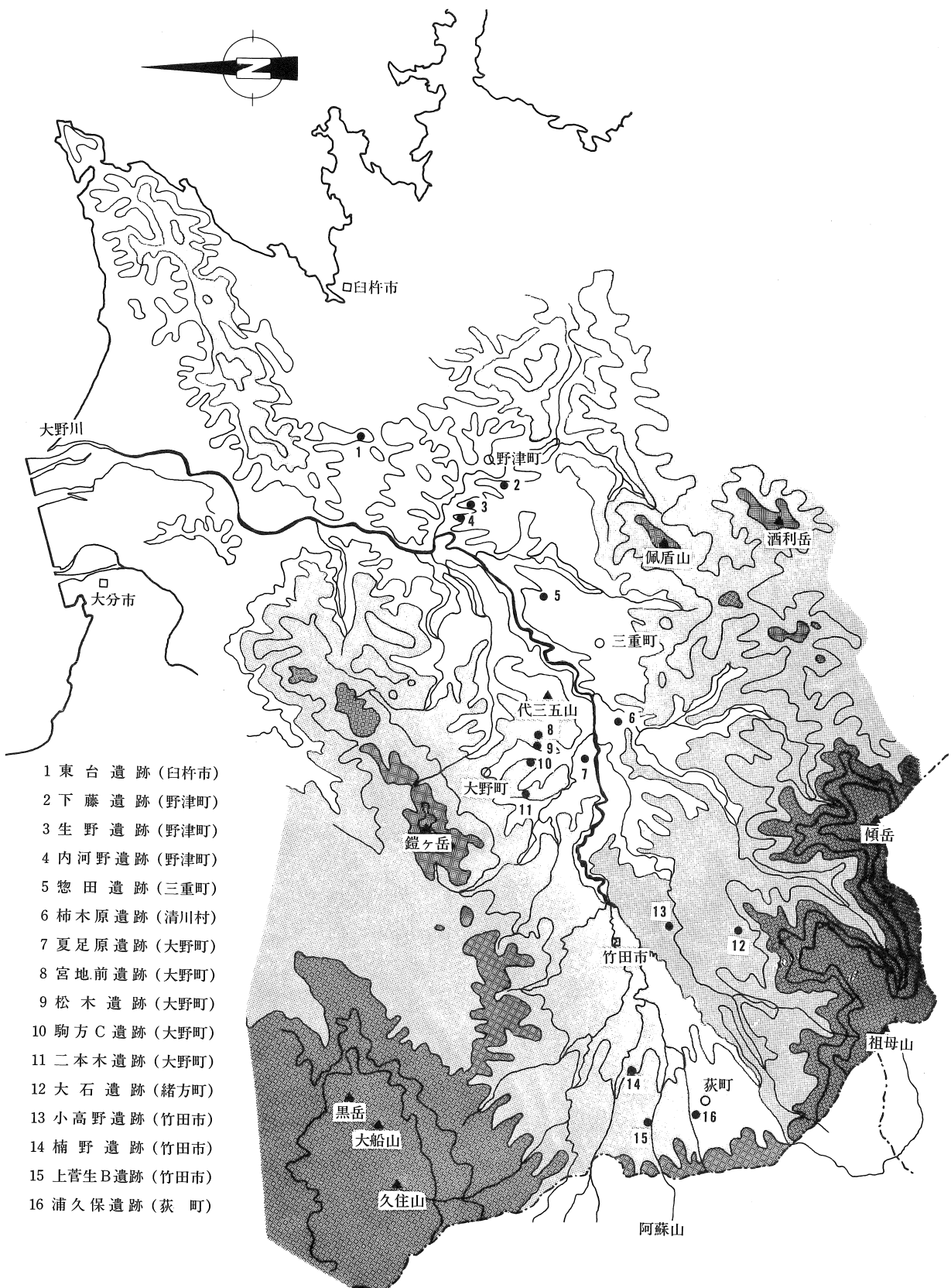
また縄文晩期の編年については、賀川光夫の提唱する大野川流域での縄文晩期農耕論の研究のため調査された遺跡の資料が基準となっている。このため緒方町大石遺跡や直入郡荻町を中心とする大野川上流域の遺跡から出土した資料から、その試論が提示されている^{註4}。しかし、これらの編年で明らかにされた資料は、わずかであり、報告書も刊行されていない状態である。

このように、大分県の昭和40年代までの縄文後晩期の編年は、後期前半が充実しているものの後期後半から晩期にかけての西平式・三万田式・御領式などは、散発的な資料や未発表な資料しかなく不明な部分が多かった。ところが、大野川流域で畑地帯総合土地改良事業に伴う調査が開始されると、大野川中流域からは主として縄文後期後半の資料が、上流域から晩期前半の資料が出土し、これらの不明な時期が埋められつつある。

そこで、本稿では、大野川中流域に地域をしぼり、縄文後期後半から晩期前半までの編年を考えてみたい。取扱う主要な遺跡は大野町駒方C遺跡・松木遺跡・夏足原遺跡・宮地前遺跡・小牧遺跡・三重町惣田遺跡・野津町生野遺跡・内河野遺跡・下藤遺跡で半径10kmの範囲におさまる。立地も阿蘇溶結凝灰岩を基盤とする標高100~200mの火山性台地の上に展開するという共通性をもつ。

東九州の縄文後期前半の編年の概要は、後期初頭に瀬戸内地方から磨消縄文の施文技法のある中津式土器の伝播に始まり、小池原上層式土器に代表されるような九州独特の磨消縄文土器の出現、そして磨消縄文施文技法の簡略化、退行現象がおり、後期後半には姿を消す。大野川中流域から出土する土器の多くは、この磨消縄文土器の衰退期である北久根山式土器・西平式土器以降のものである。

北久根山式土器は、現在、小池原上層式土器や鐘ヶ崎式土器から変遷と瀬戸内地方に分布する津雲A式土器の影響から成立すると考えられている^{註5}。一方、西四国に分布する北久根山式土器と同時期の片粕式土器も、平城式土器からの変遷がたどれる。第84図はその模式図であるが、このことについて木村剛朗もすでにふれている。1は典型的な平城式・小池原上層式の胴部文様で、渦巻の周囲を半月形の磨消縄文帯がめぐる。2は平城貝塚の資料である。類例は少ないが、片粕式土器との間を繋ぐ好資料である。すなわち、胴部の渦巻文が簡略化頸部にみられる入組文は消える。また胴部の渦巻文の周囲をめぐる磨消縄文帯にはさらに1本沈線が加わり、縄文も胴部上位全面に施



第83図 大野川流域の主要遺跡位置図

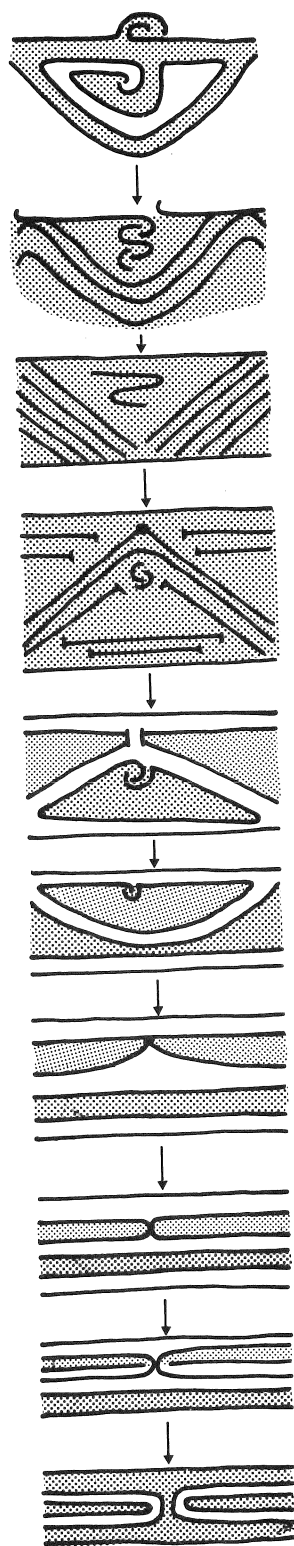
文され、縄文施文帯の上に沈線で文様を描くようになる。そして3になると2よりさらに、簡略化した文様になる。すなわち、胴部上位の縄文帯の上に渦巻文を簡略化した蛇行文とそれを中心に斜行沈線で囲む文様が描かれている。この時期を片粕式土器と呼んでおり、高知県片粕遺跡出土の土器^{註6}を標式としている。大分県でも大野町夏足原遺跡^{註7}(1)、小牧遺跡^{註8}でもみられ、豊後水道両岸地域に分布する。

次に編年されるのは大野町松木遺跡の資料である。これは高橋信武により仮称された松木式土器^{註9}(2)にあたる。この土器は、縄文地文の上に沈線による文様施文など片粕式土器からの伝統を受け継ぐものの、胴部に円形の連続刺突文や、沈線の端を刺突で強調するなど新しい文様要素が加わる。類例は松木遺跡のほか、日田市川下遺跡^{註10}(3)からも出土しており、それによると口縁部の形態は波状になるものと水平の2種類が認められる。

この松木遺跡出土の土器は類例が極めて少なく、資料も少量であるため、土器の組成など実体が不明である。このため型式として成立させるにはさらに資料の集積を待たなければならないが、口縁部などの文様は、先行型式の北久根山式とも、後続する西平式土器とも異なり、型式学的にみても一土器型式として成立する可能性が強い。

次に西平式土器であるが、この型式から古式の三万田式土器にかけての文様変遷に関しては高橋信武の分析がある。それによると、胴部の文様は、第84図の後半のように変遷するという。氏はこの変遷をもとに西平式土器とそれに直続する磨消縄文系三万田式土器をそれぞれ三期に型式分類し編年している。つまり、西平Ⅰ式土器は片粕式土器や松木遺跡の土器にみられた縄文地文上に描かれた蛇行文やC字形の組合せ文を囲む斜行沈線文で構成された三角形をした文様単位が整い、交互に三角形と逆三角形の文様単位が組み合う。そして、一部には、この文様単位の中の縄文を磨消し、磨消縄文土器になっている。西平Ⅱ式は、Ⅰ式に比較すると文様帯が狭くなると同時に、逆三角形の文様帯も細長くなり、曲線化し長い弧状になる。磨消縄文は明瞭化してゆく。西平Ⅲ式になると、さらにこの傾向は強まり文様帯は頸部周辺に集約化する。また三角形の文様単位もさらに細長くなり、平行沈線化する。一方逆三角形文は、わずかに名残りを留め、曲線化して残り西平Ⅰ・Ⅱ式にみられた入組文は向い合うC字文として、これと組み合い文様を構成している。

以上が高橋の分析による西平式土器の細分案であるが、先行する松



第84図 縄文後期中葉
磨消縄文変遷概
念図

木式土器と同様、今日まで各型式で単純な出土資料はなく、土器の組成など不明な点が多い。

しかし、文様変遷からみれば、資料が整えば将来型式として成立する可能性もある。ここでは、片粕式土器・北久根山式土器からの文様変遷のメカニズムとしてとらえ、従来からの型式である西平式土器として捉える。

西平式土器は大野川中流域では、清川村柿木原遺跡^{註12}、大野町夏足原遺跡^{註13}で出土しているが、単純遺跡はなく、後続する磨消縄文系三万田式土器と複合する場合が多い。

高橋信武の磨消縄文系三万田式土器のⅢ区区分もⅠ式は「西平式の基本型をよく踏襲している。X字文の両側が逆三角形文に、その下の二本直線が本来の三角文に相当する。下部の一本直線も同様である」と考えられている。以下Ⅱ・Ⅲ式とも、この文様の変形と考えられ、背合せになるC字文が離れ、直線文で繋ぐ文様となる。このため土器片をみた場合、磨消縄文系三万田式土器は平行沈線であるが、西平式土器の場合は斜行沈線や曲線文が加わり、判別は容易である。また、口縁部の文様も、二本沈線で囲まれた部分を磨消線文としたものが多く西平式土器の口縁部文様が三本沈線により構成されるのと比較すると簡略化している。さらに新しい文様要素として一部の土器の胴部に横方向の波状沈線文がみられる。これは、東九州に特徴的にみられる土器で、近畿地方からの影響が考えられている。^{註14}

この時期の大野川中流域での資料はこの2・3年で増加している。野津町下藤遺跡^{註15}・大野町夏足原遺跡^{註16}・三重町惣田遺跡^{註17}がそれであるが、惣田遺跡と下藤遺跡では、ほぼ単純な状態で出土している。それによると、器種は圧倒的に深鉢形土器が多く浅鉢形土器は極めて少ない。また深鉢形土器は、磨消縄文で飾られるものと無文研磨の2種類がある。両者とも口縁部形態が波状を成すものと、水平のものがある。有文の深鉢形土器は前述したように、平行沈線による磨消縄文である。また無文土器には、口縁端部の内側に一条の沈線文がめぐるのが目立つ。

東九州では、この時期を過ぎると磨消縄文は急速に姿を消す。そして新しい文様要素である羽状文が出現する。代表的な遺跡は、大野町駒方C遺跡である。中でも中心資料となる第Ⅰ区の器種は浅鉢・深鉢・注口土器で構成される。浅鉢はさらに4類に分類されるⅠ類は、口縁部が屈曲して内湾あるいは直口し、その外面に平行沈線や羽状文が施文されている(24・27)。また一部には口縁部に粘土溜を付けるものもある。Ⅱ類はⅠ類から文様を省いたものである(26・30)。Ⅲ類(25)は底部から口縁部へと直線的に延びる器形である。文様は無い。Ⅳ類(29)は胴部で稜を生じて屈曲する浅鉢で、屈曲部と頸部にかけて沈線文と羽状文による文様帯がある。

深鉢は口縁部の形態と文様により4類に分類されるが、大部分は次に述べるⅠ類とⅡ類で占められる。Ⅰ類(31・32)は水平口線の深鉢である。大きさは口径が約30cmのものから、50cmを超えるものまで大きさにバラエティがあるものの形態は同じである。文様は外面には全くなく、口縁部の内面に一条の沈線がめぐり、Ⅱ類(28)は口縁部が3～4の波状を成す形態の深鉢形土器である。これも大きさにバラエティがあるものの形態に類似し、文様も同様である。Ⅲ・Ⅳ類は、この遺跡では特殊な土器としてとらえられる。Ⅲ類(33)は、口縁部が屈曲して立ち、その外面には磨消縄文系三万田式土

器の文様と同じ文様が施文されているが、縄文はみられない。Ⅳ類⁽³⁴⁾はⅢ類から文様が消えたものであるが、屈曲した口縁部は激しく内湾している。なお深鉢形土器の底部は全て上げ底状を成す。

注口土器は、第Ⅰ区から2点、G-2区から1点出土している。前者は口縁部と注口部であるが、文様は浅い沈線文で描かれ、その構成は、前段階の磨消縄文系三万田式土器と類似する。後者は研磨された太い沈線と刷毛目状の羽状文、小さな巻貝による押圧文で構成される。両者は全面入念にヘラ研磨されている。

以上、駒方C遺跡出土の土器は、下藤遺跡・惣田遺跡と土器組成や文様の上で大きく異なる。その第1は、全体の割を占める浅鉢形土器の出現である。浅鉢形土器は、北部九州の福岡県四箇遺跡^{註18}や、西北九州の深掘遺跡^{註19}、西九州の三万田東原遺跡^{註20}などで、磨消縄文系三万田の時期に存在するものの、東九州ではこの時期にならなければみられず、出現期に時間差が認められる。第2に3:1の割合でみられるⅠ・Ⅱ類の深鉢形土器である。前段階の深鉢形土器の比率は、今日資料不足で十分理解できないが、典型的な西平式土器の口縁部が波状であるのに対しては、この時期のその形態の口縁部は少なく減少傾向にあるといえる。第3に数は少ないが注口土器の出現である。注口土器は、東九州では類例が少ないが、この時期以後、晩期初頭までみられる。最後に文様であるが、前段階の三重町惣田遺跡、野津町下藤遺跡で認められた磨消縄文が完全に消滅する。このことは、駒方C遺跡のみでなく、同時期である同町の二本木遺跡^{註21}、臼杵市東台遺跡^{註22}も同様で、さらに次の時期と考えられる野津町内河野遺跡も含めて証明される。そしてこれに置換されるようにして新しく出現するのが羽状文である。しかし、この時期の羽状文は浅鉢Ⅰ類や注口土器に施文される例が圧倒的で、他の器種にはあまりみられず、特に、深鉢には皆無である。文様施方法として、磨消縄文ほど普通化はみられない。

羽状文のみられる土器群で、駒方C遺跡より新しい傾向を示すのが、野津町内河野遺跡出土の土器群である。この遺跡は報告によると、住居跡と思われる3個所の遺構に遺物が流れ込むように堆積して出土したという。現在整理中で図示された資料は少ないが、駒方C遺跡と土器の組成や組織など異なる点が認められる。

浅鉢は、駒方C遺跡の組成とほぼ同様であるが、Ⅳ類とした胴部で稜を生じて屈曲するタイプの浅鉢の増加が感じられる⁽³⁶⁾。また文様も平口沈線文や羽状文で飾られるものが多い。

一方深鉢は、駒方C遺跡でⅠ類とした水平口線のものはみられるが⁽⁴¹⁾、Ⅱ類とした波状口縁深鉢形土器は極めて少なくなる。これに変わり、目立つのが、Ⅲ類・Ⅳ類とした口縁部が屈曲し内湾するものが多くなるようである⁽⁴⁰⁾。これは屈曲部外面に3本の平行沈線文がめぐり、以後、御領式土器をへて、晩期前半まで、深鉢形土器の主体となる形態の祖形ともいえる。また、これ以外の深鉢として、駒方C遺跡で深鉢Ⅰ類とした土器の胴部上位に平行沈線がめぐるものがあるが、これは西平式土器以来の伝統的な文様の名残りとして理解される。

文様は、羽状文と沈線文で構成されるものが多いが、一部に次の御領式土器の凹点文の祖形と思われる。円形の刺突文がみられる。また、深鉢形土器Ⅰ類とした土器の口縁部内面にめぐる一条の沈

線と口縁端部の間に羽状文が施文されているものが認められる^{註24}。この文様は、広島県馬取貝塚や岡山県^{註25}江・浜遺跡、奈良県宮滝遺跡^{註26}などでもみられ、羽状文の伝播経路を知るうえで重要である。

以上が、内河野遺跡出土の土器の一端であるが、現在整理中で、その内容は不明な部分が多い。本報告での詳細な検討が待たれる。

次に新しく考えられ、後期末に位置づけられる資料は大野町夏足原遺跡F地区から出土している。器種は浅鉢・深鉢・注口土器で構成される。

浅鉢形土器の形態は大きく分けて、口縁部先端で屈曲し、その屈曲部外面に凹線2条をめぐらせるものと(A類 42~45)胴部で一度屈曲し、さらに口縁部で屈曲し、その外面に2条の凹線や、屈曲部に凹点を施文する(B類 46)、2種類が認められる。これらは、駒方C遺跡以来の浅鉢形土器の伝統を引くもので、A類は、駒方C遺跡でI・II類とした口縁端部が内湾気味に屈曲するものが、内河野遺跡の時期を経て、この形態になったものと思われる。また、B類は駒方C遺跡でIV類とし、内河野遺跡でまとまった量が認められた胴部の屈曲する浅鉢の系統を引くものと考えられる。

次に深鉢形土器であるが、これも大きく分けて、胴部が緩く張り、口縁部が外反する(A類 48)と胴部が屈曲気味に張り、外反する頸部と屈曲して立つ口縁部をもつ(B類 47)の2種類がある。これも先行する内河野遺跡の中にその祖形を求めることができる。A類は、駒方C遺跡で深鉢I類としたもので、口縁部内側に沈線が一条めぐるものである。しかし、この夏足原遺跡F地区の資料には、この文様は認められない。またB類は、駒方C遺跡で深鉢形土器Ⅲ・Ⅳ類としたもので、内河野遺跡の時期にその類例を増加させたものである。

次に注口土器であるが、駒方C遺跡のそれに比較すれば、薄く精緻に仕上げられている。また注口土器のみみられる羽状文も、駒方C遺跡の場合、刷毛目状に細かく施されているのに対し、夏足原遺跡F地区のそれは、粗く跳ねるように施文している。

以上が夏足原遺跡F地区出土の土器であるが、土器の組成上、浅鉢形土器が増加し、鉢形土器を加えれば25%になる。また深鉢はA類60%、B類約10%である。文様は、内河野遺跡まで主体的にみられた羽状文が姿を消し、注口土器のみに施文されている。その他、器面は細い沈線文や円形刺突文から研き入れた凹線文や凹点文で飾られている。駒方C遺跡・内河野遺跡に比較すると文様性にとぼしい。また器形の上でも変化が大きく、あるいは内河野―夏足原の間に一時期あるかも知れないし、この間の社会変化の激しさを示すものかも知れない。

さらに、夏足原遺跡F地区の出土の資料の中には、現在熊本県で編年されている後期末の鳥井原式土器―御領式土器^{註27}の両者が認められる。しかし、東九州側での遺物の出土状況をみた場合、現状では分離不能であり、将来への問題として残しておきたい。^{註28}

このように、縄文後期の東九州での文様の変遷は、磨消縄文から沈線文+羽状文そして凹線文+凹点文と変化するが、これは近畿地方での元住吉山Ⅰ式から元住吉山Ⅱ式、宮滝式への変化と符合しており、従来から考えられているように、これからの文様要素の伝播により九州の土器文様も変化したと考える。しかし、中間の瀬戸内地方の実態が、今だ不明であり、その組成から併行関係は、

今後の問題として考えてゆきたい。

次に縄文晩期であるが、大野川中流域の調査例としては、平安博物館が昭和48年に調査した大野町宮地前遺跡^{註29}がある。この資料は現在、平安博物館で整理中で、内容は明らかでない。しかし、昭和50年、この遺跡が畑地帯総合土地改良事業にかかった際、多量の遺物が出土している。この資料については安藤栄治・高橋信武により報告がなされている^{註30}。ここでは、この資料に基づき、編年を試みたい。

現在、東九州での縄文晩期の刻目突帯文出現期までの編年は、3期^{註31}あるいは4期^{註32}で考えられている。以下、その成果に従い、宮地前遺跡の資料を検討してみたい。

I期は、従来大石式土器あるいは晩期Ia式とされていたものである。

深鉢は、縄文後期末の御領式土器の伝統を受け、口縁部が屈曲して直口、あるいは内傾気味に立ち、その外面には3～4条の沈線がめぐる。また、胴部にも御領式土器の深鉢にみられる小さな段の名残りである沈線が一条めぐるものもある。一方、口縁部が単純に外反する深鉢は数が減少するようで、あまりみられない。

浅鉢も、御領式土器の直接的な影響を受けたものと思われ、胴部で屈曲し外反する口縁部の先端が小さく立つ形態のものと、口縁部が小さく「く」の字状に屈曲する2種類がある。これは、先に夏足遺跡F地区の資料で述べた浅鉢A類とB類の変化したものと理解できる。さらに口縁部の文様は二本の凹線文から一本の沈線文に変化している。

このようにI期は、御領式土器の伝統下に成立した土器とも言えるが、新たに沈線文で文様を施した滋賀里I式土器が伴う。それゆえに、縄文後期と区別されるわけである。また、御領式土器の文様が磨き込まれた沈線文を文様の基調とするのに対し、この時期の文様は沈線文が主体である。

II期は、大石式土器・晩期Ib式・浦久保式土器と呼ばれる土器である。

深鉢は、I期に比較し、屈曲して立つ口縁部が外傾し、立ち上り部分の幅も拡大する。と同時に外面をめぐる沈線も数を増し、4本以上となる。また、胴部の張りは鈍い稜を生じる。底部は上げ底が少なくなる。

浅鉢は、II期と大きな変化は認められない。しかし、胴部で屈曲し、外反する口縁部の先端が小さく立つ形態のものは、さらに大きく外反部が延びる。この小さな立ち上り部の外面をめぐる沈線は一条でI期と変化はない。

II期はI期に比較すると、さらに浅鉢＝精製、深鉢＝粗製という製作上の区分が明確化する。また、大野川上流域の直入郡荻町浦久保遺跡^{註33}は、II期の単純遺跡であるが、ここでは、滋賀里II式土器を伴い出土している。

III期は、黒川式土器・晩期II式土器の一部と同類の土器で、大野川上流域の竹田市菅生石井入口遺跡^{註34}で検出された縄文晩期の住居跡は、この時期の単純時期であろう。

深鉢はII期に比較すると、さらにその特徴を顕著にし、頸部から直線的に、あるいは小さな段を生じて外傾し、その外面には粗い沈線がめぐる。また、一部の深鉢の頸部には粘土粒による蝶ネク

タイ状の飾装が付くものも認められる。底部には円盤貼り付け状のものもみられる。

浅鉢は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期とも、深鉢ほど形態上に大きな変化は見い出せない。しかし、Ⅱ期にみられた、外反部が延びる特徴が、この時期にも同様にみられ、口縁部の小さな立ち上がり部はⅠ・Ⅱ期に比較すると、鈍くなり丸味をおびている。竹田市楠野遺跡では、この時期の深鉢と一緒に、近畿地方でみられる彫刻的な三角形の削込みのある櫃原式土器が出土している。^{註35}

Ⅳ期はこれまで晩期Ⅱ式・黒川式土器・上菅生B式土器とされたものの一部を示す。

深鉢は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ期とは様相を異にし、口縁部の形態は内傾、あるいは外反するが、両者とも口縁部外面に一条の突帯がめぐる。Ⅲ期からの系統をたどれば、外反するものは、Ⅲ期の深鉢が形態変化したものに突帯をめぐらせたものと考えられ、また内傾したものは、Ⅲ期の深鉢の外反する口縁部の頸部の屈曲部より上位を欠いたものに突帯をめぐらせたものと理解できる。

浅鉢は、Ⅱ・Ⅲ期以来の伝統的なものに加えこの時期の特徴的なものとして、胴部が扁球状に大きく張り、口縁部が短かく立つものがみられる。また口縁部にはリボン状の突起が付く。

なお最近この時期の資料は増加しつつあるが、遺跡として単純なものは知られていない。あるいは、Ⅲ期または次に編年されている刻目突帯文のに含まれるものかも知れない。時期区分として独立させるのはなお今後の検討を要する。

以上が大野川中流域に多くみられる縄文後期中葉から晩期前半までの土器の編年であるが、これ以降、弥生時代前期にかけて資料は少なく今後の問題として残される。

- 註 1. 賀川光夫「縄文文化の発展と地域性—九州東南部」（日本の考古学 Ⅱ）河出書房新社 昭和40年
2. 乙益重隆・前川威洋「縄文後期文化—九州」（新版考古学講座3 先史文化）雄山閣 昭和44年
3. 坂本嘉弘ほか「石原貝塚・西和田貝塚」宇佐市教育委員会・大分県教育委員会 昭和54年
4. 賀川光夫「縄文晩期文化—九州」（新版考古学講座3 先史文化）雄山閣 昭和44年
5. （註2）に同じ
6. 岡本健児ほか「高知県片粕遺跡」（高知県文化財調査報告書 第19集）高知県教育委員会 昭和50年
7. 坂本嘉弘「大野原の遺跡 Ⅱ」大野町教育委員会 昭和52年
8. 高橋信武「片粕系土器の細分に向けて」（赤れんが 創刊号）赤れんが出版会 昭和56年
9. （註8）に同じ
10. 栗田勝弘「大分県の縄文時代遺跡—筑後川流域」（大分県史 先史篇Ⅰ） 昭和58年
11. （註8）に同じ
12. 渋谷忠章編「大分県内遺跡詳細分布調査概報 2」大分県教育委員会 昭和58年
13. （註7）に同じ
14. 近畿地方の元住吉山Ⅰ式土器にみられる連弧文が変化・退化した文様と考えられる。
15. 高橋信武「野津川流域 Ⅳ」野津町教育委員会 昭和58年
16. （註7）に同じ
17. 玉永光洋ほか「惣田遺跡」三重町教育委員会 昭和58年
18. 柳田純孝「四箇周辺遺跡調査報告書（2）」（福岡市埋蔵文化財調査報告書 第47集）福岡市教育委員会 昭和53年

19. 内藤芳篤編「深掘遺跡」(人類学考古学研究報告 第1号)長崎大学医学部解剖学第二教室 昭和42年
20. 坂本経堯他「三万田東原調査概報」泗水町教育委員会 昭和47年
21. 清水宗昭ほか「大野原の遺跡」大野町教育委員会 昭和55年
22. 賀川光夫・清水宗昭ほか「東台遺跡」臼杵市教育委員会 昭和49年
23. 栗田勝弘・後藤一重「野津川流域の遺跡 III」野津町教育委員会 昭和57年
24. 松崎寿和ほか「松永市馬取遺跡調査報告」(広島県文化財調査報告 第4集)広島県教育委員会 昭和38年
25. 間壁忠彦・間壁霞子「広江・浜遺跡」(倉敷考古館研究集報第14号)倉敷考古館 昭和54年
26. 末永雅雄「宮滝の遺跡」(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第15集) 昭和19年
27. 富田紘一「鳥井原遺跡調査報告書」熊本県教育委員会 昭和52年
28. 坪井清足「御領貝塚の発掘調査」(城南町史)城南町史刊行会 昭和40年
29. 渡辺 誠「大分県大野町宮地前遺跡発掘調査概報」平安博物館 昭和48年
30. 安藤栄治・高橋信武「大分県宮地前遺跡の採集資料—大分の晩期前半を中心とした土器編年」(赤れんが 第2号)赤れんが出版会 昭和57年
31. 高橋 徹「大分県考古学の諸問題(I)—一刻目突帯文土器の出現とその展開について」(大分県地方史 第98号)大分県地方史研究会 昭和55年
32. 玉永光洋・後藤一重ほか「楠野遺跡」(大分県文化財調査報告書 第63輯)大分県教育委員会 昭和58年
33. 高橋 徹ほか「荻台地の遺跡 IV」荻町教育委員会 昭和54年
34. 玉永光洋・後藤一重「菅生台地と周辺の遺跡 IV」竹田市教育委員会 昭和56年
35. (註32)に同じ